

悪性リンパ腫患者の化学療法 1 クール目終了後に卵胞数維持するも、2 クール目終了後に激減した事例から学ぶ、妊孕性温存治療看護支援への教訓

小松原千暁¹⁾、下西祥子¹⁾、藤岡聡子¹⁾、福田愛作¹⁾、森本義晴²⁾

1) IVF 大阪クリニック、2) HORAC グランフロント大阪クリニック

【緒言】がん治療前の妊孕性温存治療には時間制約が伴い行いたくても断念せざるを得ない場合がある。当然、化学療法を重ねることで生殖機能は低下し胞状卵胞が激減することが予測される。今回、化学療法 1 クール目と 2 クール目終了後に胞状卵胞が激減した症例を振り返り、今後の課題を検討したので報告する。

【症例】24 歳女性、悪性リンパ腫、未経妊、化学療法 (DA-EPOCH-R) 全 6 クール実施予定、1 クール目終了時にがん主治医より妊孕性温存の情報を得て当院へ紹介となる。初診時月経周期 7 日目、AMH 0.494ng/ml、右卵胞 10 mm+胞状卵胞 7 個、左卵胞 6 mm+胞状卵胞 8 個を認め、妊孕性温存について情報提供するも 3 日後に化学療法 2 クール目開始予定であり、「温存治療もしたいけど、がん治療を優先したい」と採卵を断念し、2 クール終了後に採卵を目指すことになる。2 クール目終了後には胞状卵胞は右 3 個、左 1 個と激減し、排卵誘発剤に反応不良であり採卵を実施したが卵子を獲得できず。これが喪失体験となり妊孕性温存治療を一旦中断する。約 1 年後、寛解期となり「がん治療が落ち着いたら卵巣の状態を確認しよう」と言われていたため卵巣の状況確認のため来院。胞状卵胞を確認できたため、その後 3 回の採卵を受け、合計 5 個の卵子を凍結できた。

【考察】本事例は、がん治療終了後の卵巣機能を確認するための診察を推奨していたことが契機となり、がん治療後に生殖医療機関での診察を受け卵子を獲得することができたと考えられる。本症例を教訓として妊孕性温存パンフレットに、がん治療後の生殖機能の定期検査の必要性を追記した。また、本事例では幸いがん治療後に卵巣機能が回復し卵子を獲得できたが、当院ではこの症例以降に時間制限が極端に短い場合には卵子を成熟させずとも獲得できる未熟卵体外受精法 (IVM) を用いる妊孕性温存、Onco-IVM を提案し積極的に実施している。